

## E-1

# チェコ語の所有文が表す「学校がある」について

浅岡健志朗

kenshiro.asaoka1990@gmail.com

### 1. はじめに

チェコ語<sup>1</sup>の動詞 *mít* は、所有者を主語、所有物を直接目的語とする他動詞文（所有文）<sup>2</sup>の主動詞となる、いわゆる HAVE 型動詞<sup>3</sup>である。チェコ語の所有文は、所有の中核的意味である所有権関係、親族関係、全体部分関係<sup>4</sup>をそれぞれ表すと同時に、これらからは逸脱する様々な周縁的关系を表すことができる。しかし、所有文の表す関係のカテゴリーに何が含まれるか、これら周縁的关系がどのように中核的意味から拡張されたものであるのかは、これまで明確にされていない<sup>5</sup>。所有文が表し得る様々な関係が、全体としてどのようなカテゴリーを構成しているのか、その一端を明らかにすることが本発表の目的である。具体的には、「学校がある」という意味を表す所有文の事例を中心に、これに類するいくつかの事例に関して分析を行う。

### 2. フレーム

本発表では「言語表現の意味を規定するのに必要な百科事典的な知識のまとめり」を指す用語として「フレーム」を用いる (cf. Fillmore 1982, 西村 2002)。

- (1) a. Ta                    škol-a                    je                    velk-á.  
      あの.SG.NOM 学校-SG.NOM COP.3SG.PRS 大きい-SG.NOM  
      「あの学校は大きい」
- b. Ta                    škol-a                    je                    drah-á.  
      あの.SG.NOM 学校-SG.NOM COP.3SG.PRS 高い-SG.NOM  
      「あの学校は高い」

例えば、(1a) (1b) の意味を規定するためには、それぞれ少なくとも〈ふつうの *škola* は一定の大きさの敷地や建物をもつ〉〈 *škola* に在籍するためには学費が必要な場合がある〉という一般的な知識が必要である。*škola* という語彙項目はこの他にも様々に使用され (例：「あの *škola* は教師が少ない」)、

<sup>1</sup> 印欧語族スラヴ語派西スラヴ語群。基本語順はSVO。7つの格（主格、生格、与格、対格、呼格、前置格、造格）を持ち、主に情報構造に応じて柔軟に語順が入れ替わる。

<sup>2</sup> 主語と目的語はそれぞれ主格と対格で標示される。述語は主語の人称・数・性に一致する。本発表のグロスでは性の表記を省略する。

<sup>3</sup> 典型的に、HAVE 型動詞は物理的な所有を表す動詞に由来する一方で、意味変化の結果として他動性が低く、そのために受動態を作ることができない (Stassen 2009)。動詞 *mít* はこの特徴づけにも当てはまる。

<sup>4</sup> 所有と呼ばれる一群の関係の中で、これらが中核的とされるのは、通言語的にこれら三つの関係が同じ言語形式によって表されるという明らかな傾向が見られるためである (Aikhenvald 2013)。Taylor (1996) や Langacker (2009) はこれらを所有のプロトタイプであるとしている。

<sup>5</sup> チェコ語の所有を包括的に扱った先行研究として Pit'ha (1992) があり、主に4章で動詞 *mít* を扱っている。しかし「学校がある」に関わる用法についての記述はない。

それらの意味を規定するには、また異なる知識（例：〈*škola* にはふつう複数の教師が所属している）が必要となり得る。*škola* を含む表現の意味を規定するのに必要となり得るこれら一般的知識の総体が、*škola* のフレームを構成する。そして、ある語彙項目が特定の表現の中で使用されるとき、その語彙項目は喚起されるフレームのうちの特定の側面（例えば (1a) の *škola* はそのフレームのうち敷地や建物としての側面）を表していると考えられる。

また、以下では *škola* を指すものとして「学校」と言うが、これは典型的な *škola* に関する知識と典型的な学校に関する知識には共通する点が多く、また本発表の範囲内で両者の違いが問題になることはないためであり、当然ながら両者が完全に一致すると考えているためではない。

### 3. 「学校がある」

- |                     |           |                        |           |
|---------------------|-----------|------------------------|-----------|
| (2) a. Má-m         | škol-u.   | b. Dnes má-m           | škol-u.   |
| <i>mít</i> -1SG.PRS | 学校-SG.ACC | 今日 <i>mít</i> -1SG.PRS | 学校-SG.ACC |
| 「私は学校を所有している」       |           | 「今日、私は学校がある」           |           |

(2a) は「主語の指示対象（以下、主語）である「私」が（少なくとも一定の程度）自由に扱うことができる資産としての「学校」を所有している」と解釈され得る。このように解釈された場合のこの文は、コントロール<sup>6</sup>を伴う典型的な所有権関係（ownership）に近い関係を表現していると言える。そしてここでの「学校」は、そのフレームのうち、資産としての側面を表していると考えられる。

一方、(2b) は、「（主語である）「私」が、今日、学校へ登校し、授業を受けるなどの様々な活動をした後、下校する」のように解釈され得る。このとき、(2b) における「学校」は、この語のフレームのうち、どのような側面を表していると言えるだろうか。また、その側面と、主語（所有者）との間には、どのような関係があると言えるだろうか。

(2b) の「学校」のフレームには、「学生や教師が登校し、教師が行う授業を学生が受け、教師は会議をし、ときに保護者と面談し、事務職員は事務作業を行い、各々が昼休みに昼食を食べる…」など、様々な出来事（以下、「学校での一連の出来事」）が含まれていると考えられる。そして文全体では、主語がこれらの出来事に参与するという関係が表されていると言えるだろう。

(2b) において、主語は具体的にどのような出来事に参与すると理解されるのだろうか。学校での一連の出来事には、当然、それらの出来事の参与者（学生、教師、事務職員など）が含まれており、それぞれの参与者は、それぞれ異なる出来事に参与する（学生は登校し授業を受け、教師は授業を行い会議をする）。(2b) において主語が参与する出来事が、「登校する、授業を受ける」などであると理解されるのは、主語が学生として一連の出来事に参与すると理解される場合である。ここで行われていることをより正確に言えば、話し手と聞き手が、主語に関する知識と、一連の出来事の中に含まれる参与者を参照し、主語と参与者とを対応付けている、ということになるだろう。例えば (2b) の主語が、①大学院生として学校に通っており、同時に②講師として学校で働いているとする。(2b) の解釈にあたって、①の知識が参照された場合には、主語と（一連の出来事に含まれる様々な参与者の中から）学生という参与者とが対応付けられ、その結果、主語が「授業を受ける」などの出来事に参与すると理解

<sup>6</sup> In prototypical instances of possession, the possessor (R) actively controls the possessed (T) in some manner – physically, socially, or experientially. The flip side of R controlling T is that R has an exclusive privilege of access to T. In the case of ownership (e.g. my pen), R manipulates T, determines where T is kept, and can use T whenever desired. This control also has social and experiential components. Others acknowledge these privileges. Moreover, R knows where T is and determines whether others can use it. (Langacker 2009: 83-84)

される。一方、②の知識が参照された場合には、主語と教師という参与者とが対応付けられ、主語が「授業を行う」などの出来事に参与すると理解される。

ここまで「学校での一連の出来事に参与する」という表現をしてきたが、ここで出来事に参与するとは、具体的にはどのような関係であると言えるだろうか。(2b)の発話者が学生である場合、この文は、主語(発話者)が今日学校へ行き、そこで授業を受けるなどの出来事に参与することを意図しているという内容を伝え得る。

- (3) Dnes má-m škol-u ale ne-půjd-u tam.  
今日 mít-1SG.PRS 学校-SG.ACC しかし NEG-行く.FUT-1SG そこへ  
「今日、(私は)学校があるけど、行かない」

しかし、(3)のように、実際にその出来事に参与する意図がない場合でも所有文による表現が可能である。このことから、一連の出来事に参与するという主語の意図はあくまで暗意(implicature)によるものであり、所有文の含意(entailment)ではないことが分かる。

ところで、学校での一連の出来事に参与する意図を含意しているわけではないのは、存在文の事例(4)においても同様であり、この意味で(3)と(4)は類似した内容を表している。

- (4) Dnes je škol-a, ale ne-půjd-u tam.  
今日 COP.3SG.PRS 学校-SG.NOM しかし NEG-行く.FUT-1SG そこへ  
「今日は学校があるけど、行かない」

- (5) a. Dnes má-m škol-u. b. Dnes je škol-a.  
今日 mít-1SG.PRS 学校-SG.ACC 今日 COP.3SG.PRS 学校-SG.NOM  
「今日、私は学校がある」 「今日は学校がある」

しかし、両者には違いがあり、これは(5a)と(5b)がそれぞれ容認される文脈を比べてみると明らかである。(5a)は例えば、①学生がその母親に「(祝日だけれど)今日学校がある」ことを伝える文脈での発話としては自然だが、逆に、②母親がその子供である学生に「(祝日だけれど)今日学校がある(から寝てないで早く行きなさい)」ということ伝える文脈での発話としては容認されない。一方(5b)は、①と②どちらの文脈においても自然な発話である。ここまで「主語が出来事に参与する」と表現してきた関係が所有文によって含意されている一方、それが存在文によっては含意されていないことが分かる<sup>7</sup>。問題は、この関係が具体的にどのようなものかという点である。

ここで注目すべきと思われるのは、(5a)によって表されているのは、日本語で「学校に行くことになっている」のようにも表現できる内容であるであり、この表現は一般的に、(主語の意図とは独立に)何らかの規範によって主語が学校に行くことが求められている状況を記述するものと言えるだろう。そこで、この種の所有文が表す関係を、次のように一般化する。

- I. この種の所有文は、「主語が、目的語によって喚起されるフレームに含まれる(一連の)出来事に、何らかの規範に鑑みて、参与するべきである」という関係(以下、関係A)を含意する。

<sup>7</sup>これがこの種の所有文と存在文の唯一の違いであると主張しているわけではない。この種の存在文の記述と分析は別途行う必要がある。

例えば (5a) の場合には、「〈学生は授業日には学校に行くべきである〉という規範に鑑みて、学生である主語が、学校での一連の出来事（この場合は「授業に出る」など）に参加すべきである」とでも記述できる関係が表されているということになる。

上記の文脈②における所有文 (5a) が容認されないのは、関係Aが成立しない、つまり母親が学校での一連の出来事へ参加すべきとするような規範を想定し難いためであると考えられる。一方、教師との面談のように、母親が学校へ行くべき状況を設定すれば、「〈教師との面談の際に保護者は学校へ行くべきである〉という規範に鑑みて、学校での一連の出来事（この場合は「保護者と教師と面談する」）に参加すべきである」のように関係Aが成り立つため、(5b) が容認される。

(6a-b) のような過去時制の事例においても、関係Aが含意されていることは同様である。

(6) a. Včera jsem měl škol-u.  
 昨日 AUX.1SG mít.SG.PST 学校-SG.ACC  
 「昨日、僕は学校があった」

b. Včera jsem měl škol-u ale ne-šel jsem tam.  
 昨日 AUX.1SG mít.SG.PST 学校-SG.ACC しかし NEG-行く.SG.PST AUX.1SG そこへ  
 「昨日、学校があったが、僕は行かなかった」

(6a) は、関係Aが時制の表す時点において成立していたことを表す。この文は、主語が実際に学校に行った（「学校での一連の出来事」に実際に参加した、つまり授業を受けるなどした）と理解されることが普通だろう。しかし、(6b) が容認されることから分かるように、これは暗意によるものである。

#### 4. 「学校がある」に類する事例

(7) Dnes má-m přednášk-y.  
 今日 mít-1SG.PRS 授業-PL.ACC  
 「今日は授業がある」

(7) の目的語が喚起するフレームには、「学生や教師が授業の行われる場所へ行く、学生が授業を受ける、教師が授業を行う...」といった一連の出来事が含まれていると考えられる。主語が教師である場合、話し手は、主語（話し手自身）と「授業を行う」などの出来事との間に関係Aが成立することを (7) によって表していることになる。ここでの関係Aは、〈教師は授業日には授業を行わなければならない〉のような規範に基づいて成立していると考えられる。聞き手は、主語に関する知識（主語は教師である）を参照し、授業フレームの一連の出来事の中に含まれる特定の参与者（教師）と主語とを対応付けることで、主語と「授業を行う」などの出来事との間に関係Aが成立することを理解する。文脈次第で、主語が実際に授業を行うことを意図していることが暗意として伝わる。

学校の例 (5a) と (7) が異なるのは、(5a) の学校の場合には一人の学生や教師が学校での一連の出来事に参加しようがしまいが、学校での一連の出来事が現実に成立することになる（学生が登校し、授業が行われる）のが普通であるのに対して、教師が授業での一連の出来事に参加しない場合、この出来事は現実に成立しない（授業ができない）のが普通である点である。また、(5a) の場合と同様に、(7) は「今日は授業があるが、体調が悪いので休講にする」という文脈でも問題なく容認される。以上から、

「フレームに含まれる一連の出来事が現実に成立する」という意味は、所有文によって含意されるものではなく、あくまで暗意によるものであることが分かる。

- (8) Dnes má-m kin-o.  
今日 *mít*-1SG.PRS 映画館-SG.ACC  
「今日、私は映画館がある」

(8)の発話者(主語)が映画館で働いている人物の場合、〈営業日には出勤しなければならない〉などの規範に鑑みて、主語と「出勤し、受付やチケット販売をする」などの出来事の間に関係Aが成立することが含意される。しかし、(8)はただ単に映画館に映画を見に行く人物の発話としても容認される。そして、何らかの外的な規範によって映画館に行くことが要請されている(例えば、映画に関する授業の課題で映画館に行かなければならない)必要もない。この場合の規範は、主語である発話者自身による、〈(この日は)映画館に行くべきだ(行くことにしている)〉という特定の規範であると考えられる。これは、映画館に行くことを意図していることとは(上の学校や授業の例と同様に)異なる。例えば(8)の発話の時点で、主語がこの出来事を実現しない(映画を観に行かない)ことを決めていても構わない。例えば、「水曜日は毎週映画に行くことに決めているけれど、今日は行かない」のような文脈でも(8)は容認される。

- (9) Dnes má-m Jan-a.  
今日 *mít*-1SG.PRS ヤン-SG.ACC  
「今日はヤンがある」

(9)のように、固有名詞がこの種の所有文の目的語となることもある。これ以前に見た事例では、目的語によって喚起されるフレームは多かれ少なかれ一般的なものであった。つまり、「学校」フレームに〈登校する、授業を行う〉などの出来事が含まれることは一般的な知識である。一方、「ヤン」によって喚起されるフレーム、つまり、「ヤン」についての知識は(ヤンが有名人でもない限り)チェコ語の言語共同体全体にとって一般的なものとは言えない。フレームという用語は一般的な知識について用いられることが多いが、(9)のような事例の解釈がどのようになされるかを分析するためには、このような特定の知識も扱えるように、フレームの概念を拡張する必要がある<sup>8</sup>。このような特定のフレームは、特定の狭い言語共同体(例えば、「ヤン」を良く知っている数人の友人たち)の中で共有されるものである。

例えば「ヤン」によって喚起されるフレームが、〈ヤンは教師である〉〈ヤンとハナは毎週水曜日に会っている〉というものだとする。この時、(9)によって伝えられる内容は、文脈に応じて、例えば①「今日はヤンの授業がある」②「今日はヤンと会う予定がある」などとなる。①と②それぞれの解釈は、どのように得られるのだろうか。

例えば、(9)の話し手がマルティンという学生であり、聞き手は主語に関するこの知識〈主語であるマルティンは学生である〉を持っているとする。(9)の発話において「ヤン」によって喚起される特定のフレームに含まれる様々な出来事には、〈ヤンは(学生に対して)授業を行う〉という出来事が

<sup>8</sup> ここで言うフレームの概念の拡張は、メトニミーなど他の言語現象の十全な記述のためにも必要なものであり、不当なものではない(cf. 西村 2002)。

含まれる。この出来事の参与者（学生）と主語（マルティン）とが対応付けられることで、主語とこの出来事の間に関係Aが成立することを、聞き手は理解する。結果、①の解釈が得られる。

一方、例えば話し手がハナという人物で、聞き手が〈ヤンとハナは毎週水曜日に会う〉という知識を持っているとする。(9)の発話において「ヤン」によって喚起される特定のなフレームに含まれる様々な出来事には、〈ヤンとハナは毎週水曜日に会う〉という出来事が含まれる。この出来事の参与者（ハナ）と主語（ハナ）とが対応付けられ、主語とこの出来事の間に関係Aが成立することを、聞き手は理解する。この時の関係Aは、例えば〈ヤンとハナが毎週会うことにしている〉という特定のな規範に基づいて成立している。結果、②の解釈が得られる。

## 5. おわりに

以上、「学校がある」を表す所有文の事例とこれに類する事例が表す関係を分析した。次に明らかにすべきなのは、この関係が、所有文が表す他の関係、特に中核的意味とされる関係とどのように関連しているかという点である。言い換えれば、所有文が表す関係のカテゴリーの中に、この種の事例がどのように位置づけられるかを示す必要がある。特に、関係Aの中に含まれる「何らかの規範に鑑みて」という部分が何に由来するのかが問題となるだろう。これにおそらく関連していると思われるのは、典型的な所有権関係が、所有関係に参与する当事者だけが認める関係なのではなく、所有関係の参与者ではない他者によっても同時に認められる関係である<sup>9</sup>、という点である。このことと、関係Aが外的な規範を元にして成立している（場合がある）こととは無関係ではないだろう。

また、動詞 *mit* は root modal としての用法（～すべきだ）も持つが、この用法と本発表で扱った所有文の事例は、「何らかの規範に鑑みて～すべきである」という意味を表す点において共通している。「学校がある」を表す所有文の事例が、動詞 *mit* が表す（所有文のカテゴリーを含むより包括的な）カテゴリーの中で、root modal を表す事例に隣接するものとして位置づけられる可能性がある。

## 参考文献

- Aikhenvald, Y. Alexandra. (2013). Possession and ownership: a cross linguistic perspective. In Aikhenvald, Y. Alexandra and Dixon, R. M. W. eds., *Possession and Ownership*. Oxford: Oxford University Press.
- Fillmore, Charles J. (1982). Frame Semantics. In *Linguistics in the Morning Calm*. 111-137. Seoul: Hanshin Publishing Co.
- Langacker, Ronald W. (1993). 'Reference-point constructions'. *Cognitive Linguistics*. 4. 1-38. Berlin/New York: Mouton de Gruyter.
- Langacker, Ronald W. (2001). 'Topic, subject, and possessor'. In Simonsen, Hanne Gram and Endresen, Rolf Theil (eds.), *A Cognitive Approach to the Verb: Morphological and Constructional Perspectives*. Cognitive Linguistics Research 16. 11-48. Berlin/New York: Mouton de Gruyter.
- Langacker, Ronald W. (2009). *Investigations in Cognitive Grammar*. Berlin/New York: Mouton de Gruyter.
- 西村義樹 (2002) 「換喩と文法現象」『認知言語学 I : 事象構造』(シリーズ言語科学第 2 巻) 東京大学出版会, 285-311.
- Piřha, Petr. (1992). *Posesivní vztah v češtině*. Praha: AVED.
- Stassen, Leon. (2009). *Predicative Possession*. New York: Oxford University Press.
- Taylor, John R. (1996). *Possessives in English: An Exploration in Cognitive Grammar*. Oxford: Oxford University Press/Clarendon.

<sup>9</sup> 脚注6を参照。また、所有文が表す関係は参照点関係の一種であると考えられる (cf: Langacker 1993, 2009) が、本発表で扱った所有文の事例は、参照点（所有者=主語）との関連でターゲット（所有物=出来事）が理解されるという、主題・解説関係とも共通点がある (cf: Langacker 2001)。